

「語い」指導の充実を目指して

東京都中学校英語教育研究会研究部

1 研究部の活動について

東京都中学校英語教育研究会研究部（以降 研究部）では、1983（昭和 58）年から『語いと英語教育』について、研究を継続して行っている。語いは、聞くこと・話すこと [やり取り・発表]・読むこと・書くこと 5 領域すべてに関わり、語い力は言語習得の中で主要な役割を担うことから、英語学習の重要な要素の一つとして焦点を当ててきた。近年は、「生徒の語いサイズを広げる指導の工夫」というテーマで、研究を進めている。生徒の「語いサイズ」と「語い指導」のあり方は時代とともに変化してきており、研究部では、外来語、teacher talk, student talk, 辞書指導、語いサイズを広げる指導の工夫について研究してきた（研究結果については、東京都中学校英語教育研究会研究部ホームページ「語いと英語教育」<http://www.eigo.org/kenkyu/> 参照）。

本発表にあたり、研究部では、生徒の語いを検証する語いリストグループと語い指導のあり方にかかわる語い指導法グループに分かれてそれぞれ研究を進めてきた。

2 研究報告

(1) 語いリストに関する研究

① 研究動機・研究課題

令和 3 年度より中学校で全面実施となる平成 29 年改訂学習指導要領（以下、新学習指導要領）では、生徒に指導する語い数が 1600～1800 語程度に増加しており、小学校で指導する単語の数と合わせると、2200～2500 語程度となる。平成 21 年改訂学習指導要領（以下、現行学習指導要領）で示されている指導する単語の数が 1200 語程度であったのと比較すると、中学校卒業時までには、生徒は約 2 倍の語いを指導されることになる。

この語いの増加に、今後どのように教師は対応し、生徒を指導していけば良いのかを考える必要があると考え、語いリスト部会は、3 年間の研究を計画した。

② 研究方法

(ア) 【1 年目】「研究部基本語い 1200」の作成

新学習指導要領の全面実施に先だって、現行学習指導要領において示されている 1200 語程度の語いが、具体的にはどのような単語であるのかを明らかにするために、語いリスト「研究部基本語い 1200」を作成した。リストの作成では、平成 28 年度検定教科書（6 社）の中から頻度の高い語いを抽出して、語いの選定をした。さらに、抽出した語いが「JACET8000 中高語いリスト中学編」、「CEFR-J (A1 レベル)」、「Oxford3000」の 3 つに掲載されている語いを調査し、リストの信頼性を高める工夫をした。

(イ) 【2年目】話すこと [やり取り] における発表語いと「研究部基本語い1200」の比較

2年目の研究では、生徒の即興的なやり取りを録音し書き起こしたデータを、1年目に作成した「研究部基本語い1200」に照らし合わせて、語いの重なりやその傾向を明らかにするとともに、生徒が実際に即興的なやり取りにおいてどのような語いを使用しているのかを調査した。新学習指導要領の改訂のポイントに、「話すこと」の技能が [やり取り] と [発表] の2領域に分かれたことが挙げられる。今後は語い指導においても、即興性をより一層意識することが求められると考え、研究の結果を基に、話すこと [やり取り] における語い指導の工夫について提案した。

本研究における即興的なやり取りの活動のうち、以下の9つのトピックについて調査した。

sports, food, season, free time, my favorite person, my favorite place, my school, vacation, weekend

分析は次の6つの方法で行った：

- ① 使用されている単語の数 (延べ語数、tokens)
- ② 使用された単語の種類 (異なり語数、types)
- ③ 使用語いが1200語のリストに入っている割合
- ④ 使用されている単語の数 (延べ語数) に対する単語の種類 (異なり語数) の割合 (type token ratio)
- ⑤ どのような単語を多く使用しているか
- ⑥ 英語で何と言ったらよいかわからなかった単語

(ウ) 【3年目】発表語いの習得に関する、生徒と教師の意識差の分析

当初は、2年目に分析したデータの信頼性を高めるために、引き続き、同様の方法でデータを収集し分析する計画だった。しかし新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、授業中に即興的なやり取りを継続的に実施することが難しくなったことから、方針を転換し、2年目の研究で実際に即興的なやり取りを指導した教師と、その指導を受けて即興的なやり取りをした生徒に対して、自由記述型の質問紙調査を実施し、KH Coder を用いて計量テキスト分析を実施した。ただし、本研究は臨時休校期間に実施したこともあり、回答数が十分でないことから、試行調査の色合いが強いことをご容赦いただきたい。

③ 研究結果

(a) 研究部基本語い1200

以下に、作成したリストの一部を掲載した。しかし、複数ページにわたる膨大

な資料であるため、全体を確認したい場合は、東京都中学校英語教育研究会研究部 HP (<http://www.eigo.org/kenkyu/>) に掲載している研究紀要「語いと英語教育(42)～研究部基本語い 1200 と語い指導再考(1)～」を参照されたい。

表1 「研究部基本語い 1200」(一部抜粋)

研究部基本語い1200				研究部基本語い1200				研究部基本語い1200				研究部基本語い1200			
単語	品詞	頻度	レベル	単語	品詞	頻度	レベル	単語	品詞	頻度	レベル	単語	品詞	頻度	レベル
a	冠	6	1	animal	名	6	1	bear	名	3	1	box	名	6	1
a.m.	副	5	0	another	形,代	6	1	beautiful	形	6	1	boy	名	6	1
able	形	5	1	answer	動	6	1	became	動	5	0	brave	形	3	1
about	前,副	6	1	any	形,代	6	1	because	接	6	1	Brazil	名	5	0
above	前	3	1	anyone	代	4	0	become	動	6	1	bread	名	4	1
abroad	副	6	1	anything	代	6	1	bed	名	6	1	break	動,名	6	1
across	前,副	6	1	anyway	副	4	0	beef	名	4	1	breakfast	名	6	1
act	動	3	1	apple	名	5	1	been	動	6	0	bridge	名	4	1
activity	名	2	1	april	名	6	1	before	副	6	1	bright	形	3	1
actor	名	3	1	are	動,助	6	0	began	動	6	0	bring	動	6	1
actually	副	5	1	area	名	4	1	begin	動	6	1	broke	動	3	0
add	動	4	1	arm	名	4	1	behind	副	5	1	brother	名	6	1
adventure	名	4	0	around	前,副	6	1	believe	動	6	1	brought	動	5	0
advice	名	4	0	arrive	動	5	1	bell	名	3	1	brown	名,形	4	1
afraid	形	5	1	art	名	6	1	below	副	3	1	brush	名	3	1
Africa	名	5	0	as	副,連,助	6	1	belt	名	4	0	build	動	6	1
after	代,形,副	6	1	ask	動	6	1	best	名,形	6	0	building	名	5	1
afternoon	名	6	1	at	前	6	1	better	副,形	6	0	built	動	6	0
again	副	6	1	ate	動	6	0	between	副	5	1	burn	動	3	1
against	前	5	1	athlete	名	3	0	big	形	6	1	bus	名	6	1
age	名	5	1	attention	名	4	1	bike	名	6	1	busy	形	6	1
ago	副	6	1	August	名	6	1	bird	名	6	1	but	接	6	1
agree	動	6	1	aunt	名	5	1	birthday	名	6	1	buy	動	6	1
air	名	4	1	Australia	名	6	1	black	名,形	6	1	by	前	6	1
airport	名	4	1	away	副	6	1	blind	形	3	1	bye	副	4	0
all	代,形,副	6	1	baby	名	6	1	blossom	名	3	1	cake	名	6	1
almost	副	6	1	back	副,名	6	1	blow	動	3	0	call	動	6	1
alone	副	3	1	bad	形	6	1	blue	名,形	6	1	came	動	6	0
along	前	5	1	bag	名	6	1	boat	名	5	1	camera	名	6	1
already	副	6	1	ball	名	5	1	body	名	4	1	camp	動	3	0
also	副	6	1	banana	名	3	1	bomb	名	4	1	can	動,名	6	1
always	副	6	1	band	名	4	1	book	名	6	1	Canada	名	4	1
am	動,助	6	0	bank	名	3	1	bookstore	名	5	1	cannot	助	6	0
amazing	形	5	1	baseball	名	6	1	bored	形	2	0	cap	名	5	1
America	名	4	1	basketball	名	6	1	boring	形	3	0	capital	名	3	1
American	形	4	1	bath	名	6	1	born	動	6	0	captain	名	3	0
among	前	5	1	be	動,助	6	1	borrow	動	6	1	car	名	6	1
an	冠	6	1	beach	名	4	1	both	代,形	6	1	card	名	5	1
and	接	6	1					bottle	名	5	1	care	名	6	1
angry	形	5	1					bought	動	6	0	careful	形	5	1

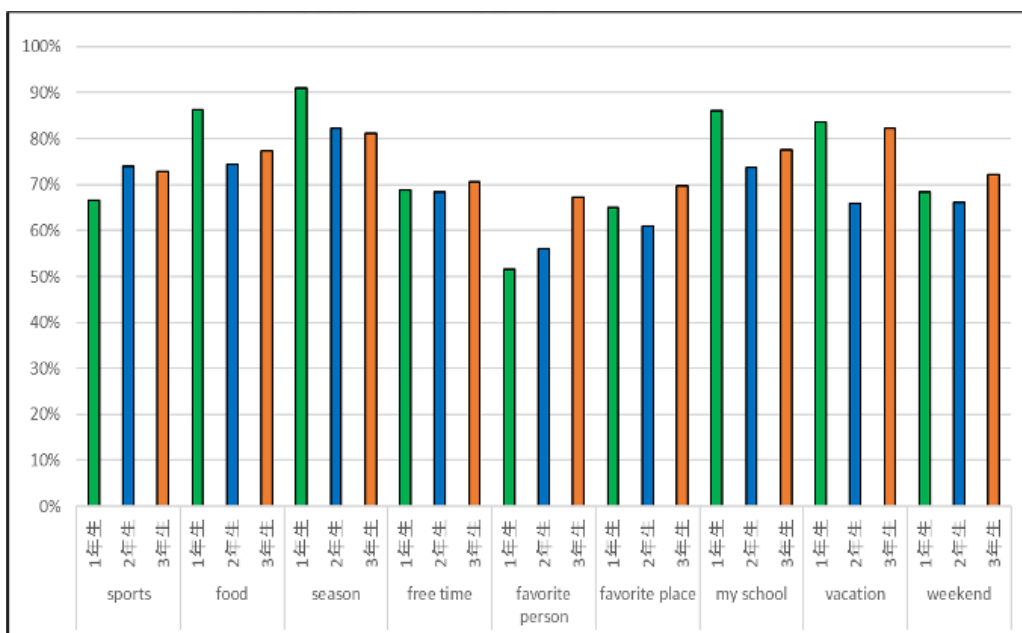
(b) 話すこと [やり取り] における発表語いと「研究部基本語い 1200」の比較

研究は6通りの分析方法で進めたが、ここではその内の4つを紹介する。棒グラフについては、緑が1年生、青が2年生、オレンジが3年生を表している。なお本調査は、延べ13校にわたって、1年生71ペア、2年生139ペア、3年生105ペア、合計315ペアから抽出したデータを分析した。

(a) 使用語いが「研究部基本語い 1200」に含まれていた割合

すべてのトピックで50%以上の語がリストの1200語に含まれていた。トピック“Favorite Person”を除いた、他のトピックは60%～90%の割合で、1200語に含まれていた(表2参照)。

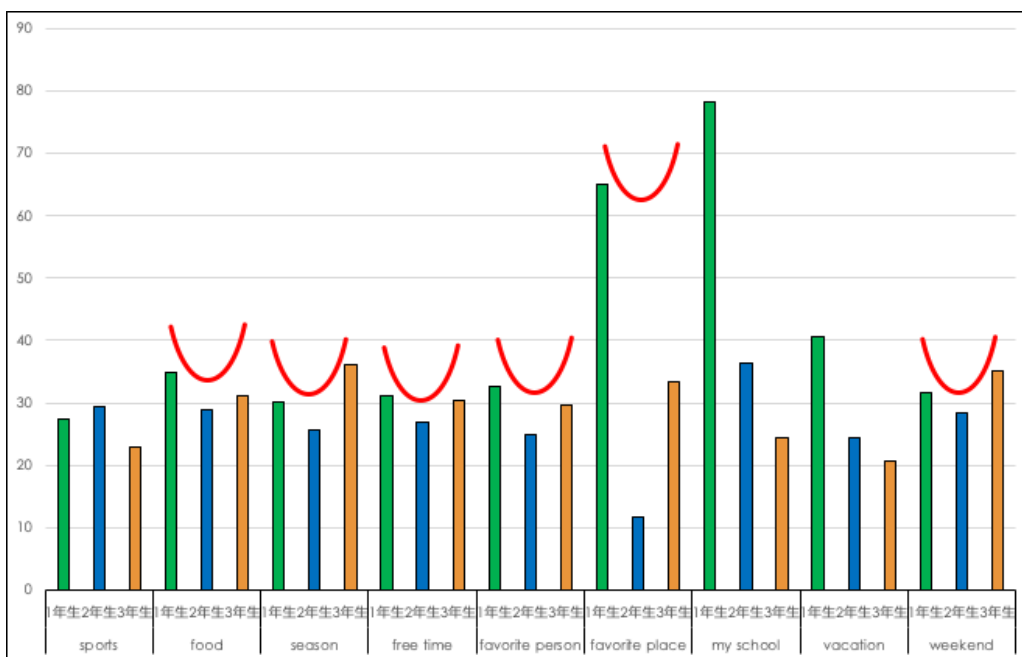
表2 使用語いが「研究部基本語い 1200」に含まれていた割合



(b) 1分あたりの延べ語数 (tokens) 学年別平均

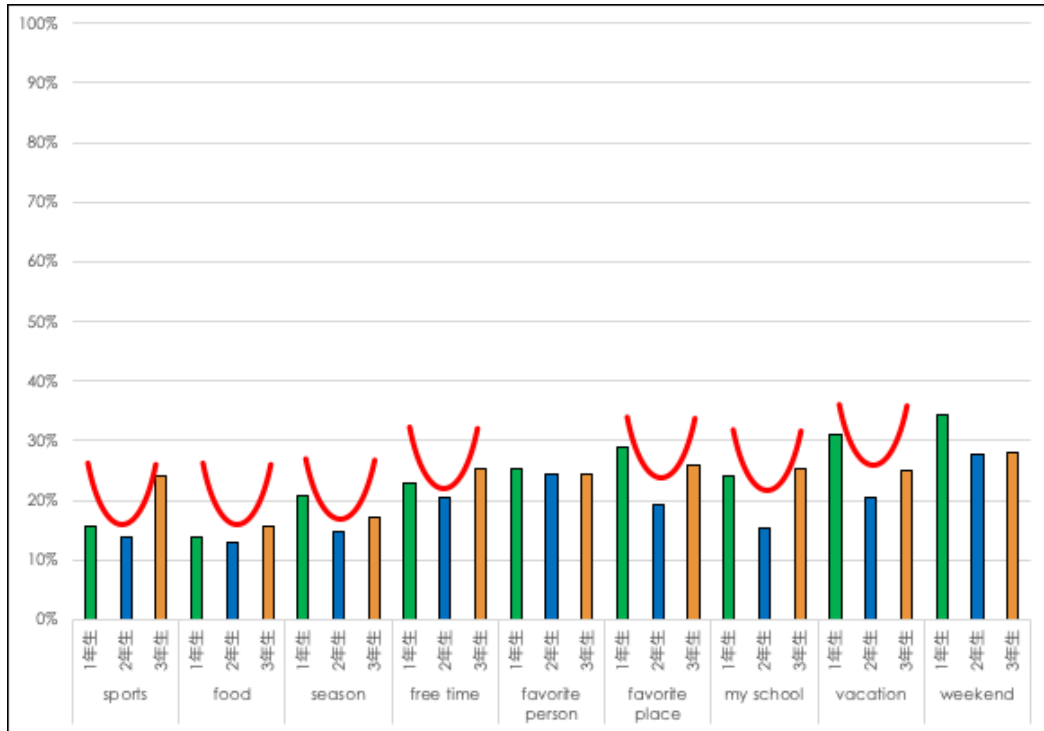
棒グラフの頂点がU字型となり、9つ中、6つのトピックで、2年生で発話語数が伸び悩む傾向があった (表3参照)。

表3 1分あたりの延べ語数 (tokens) 学年別平均



- (c) 延べ語数に対する単語の種類（異なり語数）の割合（type token ratio）
 これは、生徒が発した延べ語数に対して、どのくらい異なる語を使用しているかを表す割合である。トピックによって差があるが、2.のグラフ同様に、棒グラフの頂点がU字となり2学年の割合が低くなる傾向があった(表4)。

表4 延べ語数に対する単語の種類（異なり語数）の割合（type token ratio）



- (d) 各トピックで使用されていた語（品詞別）
 一番多く使用された語の品詞は名詞で、全体の27%だった。固有名詞を含めた名詞がどのトピックでもよく使われていた（表5参照）。

表5 各トピックで使用されていた語（品詞別）

品詞	Sports		Food		Season		Free time		My favorite person		My favorite place		My school		Vacation		Weekend		合計			
名詞	4	24%	1	6%	5	29%	5	31%	3	19%	2	15%	3	14%	65	33%	2	11%	90	27%		
代名詞	人称代名詞		2	12%	3	18%	3	18%	3	19%	5	31%	4	31%	3	14%	9	5%	3	17%	35	10%
	疑問詞		1	6%	1	6%	1	6%	1	6%	1	8%	3	14%	7	4%	2	11%	18	5%		
動詞	3	18%	4	24%	4	24%	4	25%	2	13%	3	23%	3	14%	43	22%	6	33%	72	21%		
助動詞	3	18%	1	6%	1	6%	1	6%	1	6%	1	8%	1	5%	2	1%	1	6%	12	4%		
形容詞	0	0%	2	12%	1	6%	1	6%	1	6%	1	8%	1	5%	28	14%	0	0%	35	10%		
副詞	3	18%	2	12%	0	0%	0	0%	2	13%	1	8%	4	18%	20	10%	1	6%	33	10%		
その他	1	6%	3	18%	2	12%	1	6%	1	6%	1	8%	4	18%	26	13%	3	17%	42	12%		
合計	17	5%	17	5%	17	5%	16	5%	16	5%	14	4%	22	7%	200	59%	18	5%	337	100%		

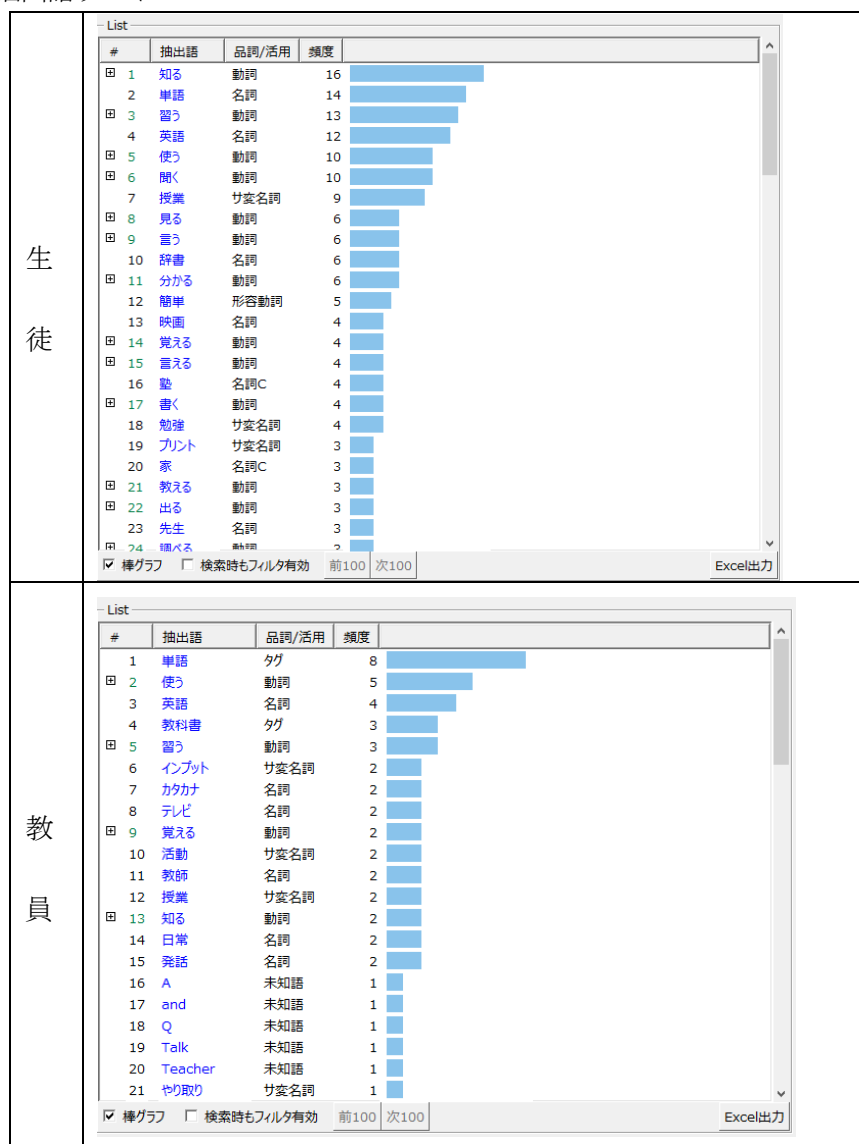
上記の4つ以外のデータを確認したい場合は、前出の研究部HPに掲載している研究紀要「語いと英語教育(43) ～研究部基本語い 1200 と語い指導再考(2)～」を参照されたい。

(ウ) 発表語いの習得に関する生徒と教師の意識差の分析

「英語での即興的なやり取りにおいて、英語で言えた単語について、考えられる理由を書いてください。」という質問に対して回答された自由記述を、KH Coder を用いて計量テキスト分析を実施し、「抽出語リスト」及び「共起ネットワーク」として出力した。なお、本調査では、教員アンケート7名と生徒アンケート2校の回答を調査した(表6参照)。

(a) 抽出語リスト

表6 抽出語リスト



このリストは、自由記述回答に多く出現した順に単語が並べられている。「知る」、「使う」、「授業」、「覚える」といった語は、両者に共通してリスト内に含まれていた。

一方で、「辞書」と「プリント」は生徒に特有の回答語で、生徒は教科書以外のインプットからも発話に使う語いのヒントを得ていることを示唆している。また、「カタカナ」は教員の回答では出現しているが、生徒の回答では頻出語としてはリストに含まれなかった。これは、カタカナ語をより明示的に指導することで、生徒の発表語いをさらに広げることができる可能性を示唆している（表6参照）。

(b) 共起ネットワーク

図1 共起ネットワーク

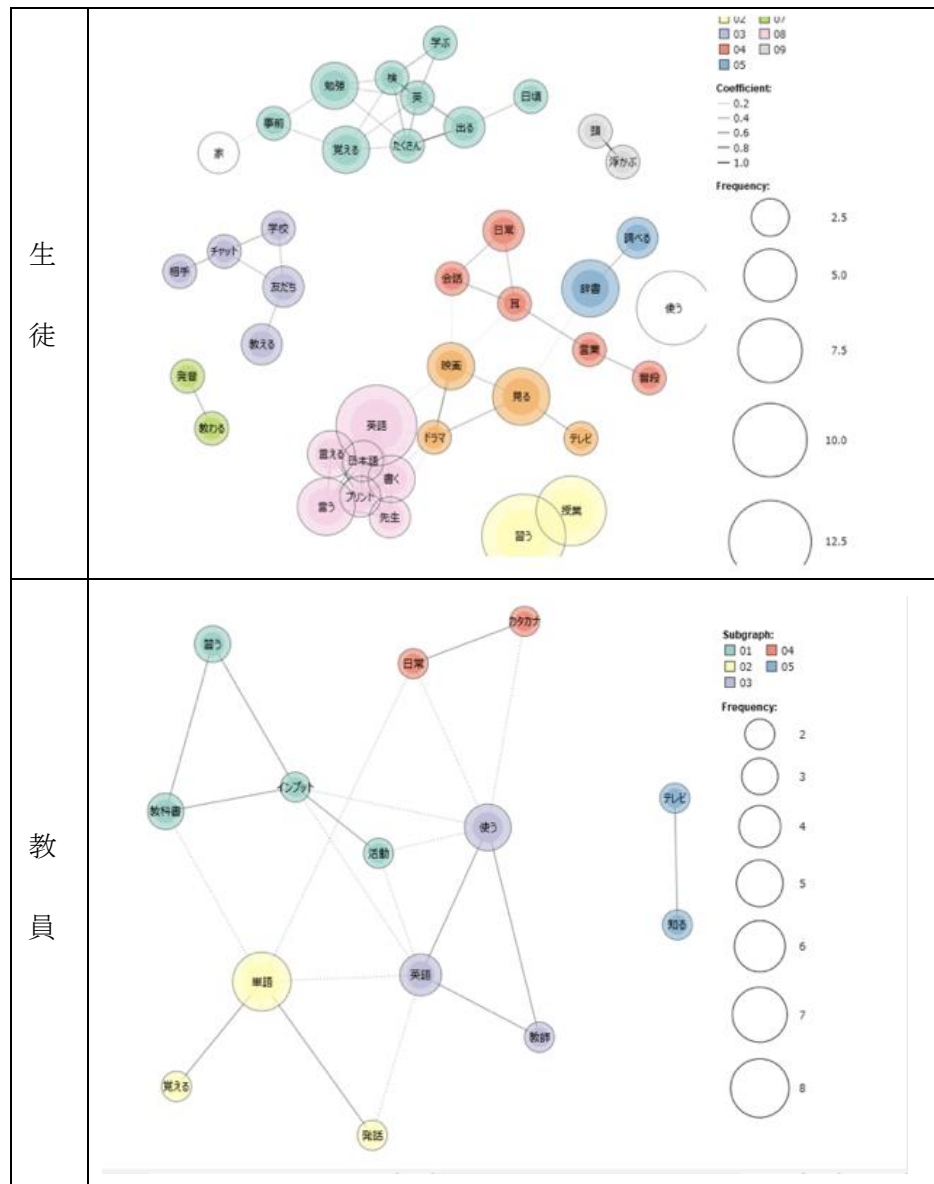


図1は、語の出現パターンの似通ったものを線で結んで、共起関係を表した図である。生徒側の図の「見る」に着目すると、「映画」「ドラマ」「テレビ」との共起関係が示されており、これらの映像を通して触れたことのある語は、即興的な会話でも使える可能性が高いことを示唆している。教科書を用いて生徒の語いを広げていくことの重要性は言うまでもないが、題材にまつわる映画やテレビ番組を視聴することが、生徒の発表語いの習得に好影響を及ぼす可能性を秘めていることが示唆される。

④ 考察・教育的示唆

(ア) やり取り前の指導の工夫

即興的なやり取りにおける生徒の使用語いは、全てのトピックにおいて、50%以上の単語が「研究部基本語い1200」の中にある語を発話していた。My Favorite Person のみ60%を下回ったが、本トピックでは人名などの固有名詞が多用されたため、必然的に割合が低くなったものと考えられる。研究結果で示した「各トピックで使用されていた語(品詞別)」において、最も多く使用されていた品詞が名詞だったことを鑑みると、トピックに特有の語いをやり取りの前に生徒に提示したり、短時間の考える時間を与えて固有名詞を想起させたりすることで、生徒の発表語いが増加することが期待できる。

(イ) 語いに複数回にわたって触れることができる意図的・計画的な指導

即興的なやり取りにおける生徒の発話語数については、学年が上がるにつれて、異なり語数が増加する傾向があることがわかった。これは、英語学習の積み重ねの結果、語いの幅に広がりが見られることを示唆している。

一方、延べ語数は2年生で一度減少し、3年生で再び増加する傾向が見られた。書き出したやり取りを分析すると、1年生はDo you...? Questionが多いのに対し、2年生は疑問詞を用いて質問し、説明する表現が増えていることがわかった。このことから、2年生は難易度の高い表現を使おうとして考える時間を取ってしまうとやり取りが止まる時間が多くなり、延べ語数や延べ語数に対する異なり語数の割合が減少したと考えられる。3年生では、その段階を経て自動化が進んだことで、時間をかけずに学んだ表現を用いることができるようになったと考えられる。この結果から、語いは一度インプットされても、発信語いとしてスムーズにアウトプットされるまでに時間がかかることが示唆される。教師は生徒が語いに複数回触れられるように意図的・計画的な指導をすることで、インプットした語いが即興的なやり取りの中で使われるようになるまでの橋渡しをすることが重要であると考えられる。

(ウ) 多角的な語いのインプット

生徒及び教員の質問紙における自由記述を分析した結果、教師が考えている以上に、生徒は辞書やプリントから得た語いを即興的なやり取りの中で使用してい

ることがわかった。一方で、語い習得の上で効果的とされているカタカナ語については、教師側からより明示的に指導する必要性があることが示唆された。これらの結果から、語い指導には多角的なアプローチが必要であると考えられる。教科書で扱われている語いに留まらず、テレビ番組や映画、インターネット動画などの視聴覚教材を用いるなどの幅広い指導が、生徒の語い習得に効果的であることが推測できる。

(2) 語い指導法に関する研究

① 主題設定の理由

『新学習指導要領』において、語いの指導に関しては、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語を指導するとあり、実際のコミュニケーションにおいて必要な語を中心に、中学校卒業時には、2200～2500語の語いを触れさせることとなる。語いが増えるにあたって考えられる指導法は、例えば、本文を読む前にフラッシュカードやビンゴで単語の訳語を提示する方法や、適切な導入をする前に、生徒に自力で読ませ新出語の意味は辞書を引かせる、あるいは単語テストの頻度を増やすなどが挙げられる。しかしそれらの方法は語い指導として本当に効果的な方法であろうか。研究部の語い指導グループでは効果的な語い習得を目指すため、より良い語いの指導法や授業における活動について考えた。

② 研究の概要

本研究では、効果的な語い指導法の研究と授業における活動の分類と開発に取り組んだ。

(ア) 効果的な語い指導法の研究

教科書の新出語導入の際、どの場面でどのように指導を行うと、より効果的か実際の指導を見ながら検討した。まず、語い指導法の現状を把握するため、どのように指導しているかを以下の8種類に分類した。そして研究部員が教科書本文の語いを指導にどのように指導したかをまとめ、指導法の工夫について検討した。

- (ア) 絵や写真で示す
- (イ) 実物を示す
- (ウ) 教師がジェスチャーで示す
- (エ) 文字や記号を板書する
- (オ) 既習の英語による言い換えをする
- (カ) 英語で具体例を例示する
- (キ) 日本語による説明
- (ク) 辞書を引く

(イ) 授業における活動の分類と開発

1つの単元における指導案を持ち寄り, Nation (2001)による理論である 4 strands に当てはめて, 語い指導の活動を分類した。そして実際の授業で行い, 研究部員の指導手順や感想を集め, 研究を深めた。4 strands とは, 以下の通りである。

(ア)	meaning-focused input (内容にフォーカスを当てたインプット活動)
(イ)	meaning-focused output (内容にフォーカスを当てたアウトプット活動)
(ウ)	language-focused learning (言語要素にフォーカスを当てた活動)
(エ)	fluency development (既習の内容を使って流暢さを育成する統合的な活動)

また, 授業で実践した活動を分類した結果, 特に (イ) と (エ) の活動が授業の中で少なかったため, 授業における産出に焦点を当てた活動を新たに開発した。

3 研究の結果と今後の課題

(ア) 研究結果

(a) 効果的な語い指導法の研究

語い指導の具体的な指導方法におけるデータは以下のようなものである。紙面の都合で一部しか載せることができないが, 指導の分類と具体的な指導例やそのように指導した理由をまとめた。

	Oral	Expl	指導の分類	具体的な指導例や指導の理由
[A]				
air conditioner	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	絵や写真	写真を見せた
air pollution	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	日本語	
amazing	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	言い換え	It means surprising.
angry	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	ジェスチャー	手で鬼の角を表し, 怒っていると表現
anymore	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	辞書ひき	文脈で予想しづらいため, 辞書で調べさせた

語い指導法の現状は, 1年生では, 非言語的要素を用いた方法が多く, 学年が進むにしたがい, 生徒が理解できる語いが増えていくため, 簡単な英語での言い換えや例示が増えた。抽象的な語いは日本語を介していることが多いことがわかった。

例えば, 絵や写真で示した語いは carpenter や garden など絵や写真を提示するには意味が分かるものが多くあり, 既習の英語による言い換えは sightseeing や advantage がある。sightseeing→to see famous places, advantage→good points のような例があった。研究部で考えたより良い語い指導は以

下の3点である。

- ・ 音声→文字の順で指導する
- ・ 単語を文脈の中で意味やイメージをつかませた後に読ませる
- ・ 生徒に自力で本文を読ませる場合は、未習語が本文全体の語数の2%程度になるようにする

(b) 授業における活動の分類と開発

一部ではあるが、Nation (2001)に照らし合わせて分類した結果は以下の通りである。

1) meaning-focused input

活動	指導手順	部員の感想
教師のスモールトーク	授業のはじめに時事的なことやその日にまつわる話を英語で行う。	授業で行う場合は生徒とやり取りしながら聞かせることが大切である。

2) meaning-focused output

活動	指導手順	部員の感想
本文を活用したリテリング	本文の指導後、データや自分の意見を含めたリテリングを行う。	新出語を実際に使わせながら行うため、生徒にとって語いを習得しやすい。

3) language-focused learning

活動	指導手順	部員の感想
Definition Game	単元のまとめとして行う。ある単語のDefinitionを教師が言い、その単語を生徒が言う。	口頭で行った後に、プリントに英英辞書の定義を載せ、単語を書かせると効果的である。

4) fluency development

活動	指導手順	部員の感想
Picture Describing	Picture Cardなどを黒板にはり、生徒に英語で描写させる。	英語が苦手な生徒が多い場合は、単語レベルから発話させると良い。

研究の結果、inputの活動が多く、outputに焦点を当てた指導が少ないことが分かった。そのため、以下の活動を新たに開発した。

活動	指導手順	留意点
ALT の発話 reporting	ペアで行う。ALT のところで発話を聞き、ペアの相手に英語で伝える。	聞かせる英語の内容や話す速度を、生徒の習熟度に応じて調整する。
宝探し道案内	学校内に宝を隠したことにし、そこまでの道案内を英語で行う。	Turn right. や Go upstairs.などの既習の英語を使用させる。
Picture card を使った推測	Picture card を使い、本文内容を推測させ、英語で発話させる。	Input と Output を繰り返しながら何度も思考させる。
Fluency reading	4人グループで違う内容の英文を読ませ、リテリングさせる。読む英文を交代する。	回数を増やす毎に英文を読む時間を減らし、話す時間を増やしていく。

(イ) 考察

語い指導の工夫について、語い指導を分類し、より良い指導について考えた結果、本研究では言語習得の理論にのっとり、語いの音声イメージを与えたあとに文字を提示することが重要であると考えた。また、Nation の文献には「教師の支援なしでテキストを読むためには、98%の単語が既習語いでないと自力で読むことは難しい」とある。新出語が多い英文を読ませる場合は、Oral introduction や pre-reading 活動で提示するなど、前もってある程度、単語の発音を何度か聞かせるなど新出語を導入してから生徒に本文を読ませる手法が効果的だと考えられる。

語いを使った活動について、現状では教師が授業内で十分な input を行おうとするため、言語要素に焦点を当てた指導が多く、output に焦点を当てた指導が少なかった。適切な input 無くして、即興的な活動をさせることは生徒にとって負担が多く、達成感が得られなくなると考えられる。そのため、十分な input や正しく文や語を使わせるため、言語に焦点を当てた指導も必要であるが、output や fluency に焦点を当てた活動を同時に行うことで、語いの定着につながると考えられる。本研究では、4 strands をバランスよく行っていくことが重要であると考えた。今後はより良い語い指導の結果、生徒がどのような語いを習得したか効果の検証を行っていきたい。

3 終わりに

研究部では、生徒の効果的な語い習得を目指すために、生徒が話すこと [やり取り] において使用する語いの調査と効果的な語いの指導と理論に基づいた活動について研究を進めてきた。今後も、生徒が産出活動や将来の英語学習に役立つ語いはい何かを追求し、また、文脈の中で音声から文字を示すなど、それらの語彙との最初の出会いを大切する指導を目指していきたい。

参考文献

Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.

東京都中学校英語教育研究会研究部ホームページ【令和 3 年 1 月 10 日閲覧】

<http://www.eigo.org/kenkyu/>